

第3章 糸魚川市の歴史文化の特徴

自然的・地理的環境、社会的状況、歴史的環境、そして指定・未指定文化財の特徴から、本市の歴史文化の特徴を以下のように整理します。

1 ジオパークのまち

日本で最初のユネスコ世界ジオパークに認定された糸魚川市には、日本列島を横断するフォッサマグナとその西端を画する糸魚川－静岡構造線やヒスイなどをはじめとする、日本列島の生い立ちを物語る地質の多様性があります。また、日本海から飛騨山脈や頸城山塊へ至る起伏に富んだ大地や火山、地すべりなどの多様な地形を合わせ持っています。さらに、日本海に面した温暖湿潤気候下の多雪を反映し、水環境と森林環境に恵まれ、貴重な野生動植物が数多く生息・生育しています。

このような特徴ある大地に、私たちの祖先が定着し、大地や自然の要素に影響されながら、独特で多様な文化を花開かせてきました。南北に連なる飛騨山脈は、陸上交通の大きな障壁となって、東西文化の境界となりました。また、プレートの運動によって地球深部からもたらされたヒスイは世界最古級のヒスイ文化の材料となり、糸魚川－静岡構造線に沿ってできた低地をたどって塩の道ができました。さらに、地形・地質の多様さに応じて、地震、火山、地すべり、土石流、雪崩、洪水、風害などの自然災害の種類や頻度が多く、自然災害との戦いや共存の記録が数多くあります。

上述した、大地と人との密接な関わりを示す糸魚川の資源は、地球上の変動帯と呼ばれる現在の地殻変動が活発な地域における人々の暮らし方や、持続可能な地域社会のあり方を考える参考になると期待されています。



図 17 地質の境目

2 世界最古級のヒスイ文化発祥の地

世界では、マヤやオルメカ、アステカ、中国などヒスイを加工し、装飾品として利用した文明が知られています。マヤやオルメカは紀元前から利用されているものもあり 3,500～4,000 年ほど遡ることができます。また、ヨーロッパでは、イタリア・フランス国境のヒスイ産地でヒスイ製の石斧が紀元前に流通したという研究もありますが、明確な年代は示されていません。しかし、本市の大角地遺跡の発掘調査で出土したヒスイ製たなきいし敲石は縄文時代前期（約 6,500 年前）の所産であると判明しています。その後、縄文時代中期（約 5,000 年前）にはヒスイ製の装飾品の加工が盛んになることから、糸魚川が世界最古級のヒスイ文化発祥の地と言えます。

奈良時代以降、国内におけるヒスイの産出は忘れ去られてしまいます。このため、国内の遺跡から出土したヒスイは海外からもたらされたとする考古学者も存在しました。しかし、昭和 10 年代にヒスイの原産地が糸魚川にあると明らかになり、本市に多くの加工遺跡が所在するという事実も発掘調査で明らかになってきました。発掘調査が行われた国史跡の長者ヶ原遺跡や寺地遺跡は、加工生産遺跡として整備活用がなされているほか、新幹線建設などの開発に伴い、平野部に埋没した縄文時代から古墳時代にかけてのヒスイ加工関連資料を出土する遺跡からもヒスイを利用していた頃の糸魚川の歴史がうかがえます。

国内で出土した縄文時代の遠隔地交流を示すヒスイ製玉類のほとんどが、原産地を抱える本市で加工されたものと考えられています。ヒスイのような広域に及ぶ流通を示す遺物は少なく、往時の交流の実態を解明していく重要な資料となります。北は北海道から南は沖縄まで流通が確認され、各地の拠点となるような遺跡からは、複数のヒスイ製大珠が出土しています。縄文時代中期から後期前葉には中部以北から北海道にかけて、縄文時代晩期には北海道から沖縄まで、弥生時代には畿内や北九州などの西日本を中心に流通し、古墳時代には朝鮮半島まで広がったことから、日本および東アジアの古代史を解明するうえで貴重な考古資料のひとつです。



長者ヶ原遺跡出土ヒスイ



長者ヶ原遺跡 穿孔途中のヒスイ



後生山遺跡出土ヒスイ



寺地遺跡出土ヒスイ

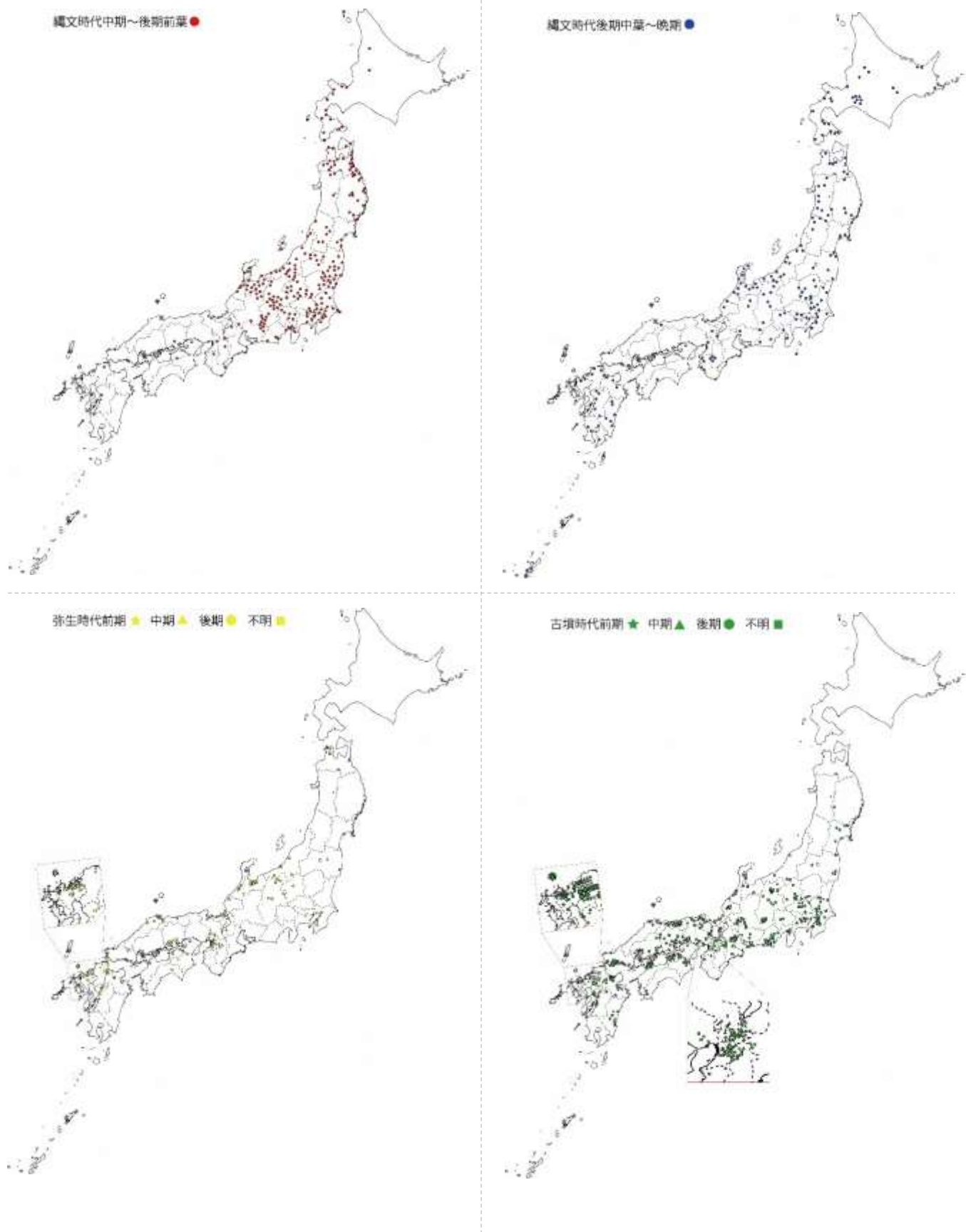


図 18 糸魚川産ヒスイ製大珠の分布
(縄文時代中期～古墳時代)



図 19 朝鮮半島ヒスイ勾玉(曲玉)分布図
(三国時代)

3 境界が作り出す歴史文化の交流の地

当市には、日本を縦断する糸魚川－静岡構造線が通り、東日本と西日本の境界に位置しています。古代以降、北陸道（加賀街道）が通り、交通の要衝として発展してきました。そのため、当市周辺では様々な東西文化の混在地域となっています。

また、東西の交流のみならず、糸魚川－静岡構造線沿いの低い丘陵には、松本街道が通り、海と山の行き来も盛んに行われました。

越中、信濃との境界を有する当市では、中世頃になると、街道沿いに城館が築かれ、国境の防備が固められました。

加賀街道や松本街道や糸魚川の宿場の発展により人の往来は活発となり、大阪の四天王寺舞楽の流れをくむとされる天津神社や能生白山神社の舞楽（糸魚川・能生の舞楽）など様々な文化も伝わっています。また、廻船に従事する者も多く、北前船でより広域的な情報や文化が行き交い、肥前陶磁器や尾道産の石造物や瀬戸内の塩などがもたらされました。

その一方、険しい山岳を背後に持ち、それらから流れる河川で形成された谷地形は、「西浜七谷」と呼ばれ、谷ごとに集落が形成されました。谷と言う閉鎖的な空間のなかで、方言や笹寿司等の食べ物、伝説などで異なる文化が形成されてきました。

近代になり、この地に生を受けた相馬御風は、東京で学び、様々な文化に触れた後故郷糸魚川へ帰郷しました。御風は、文芸活動の傍ら、地域研究にも力を入れ、水保観音堂の木造十一面観音立像の国宝指定や庶民文化であるバタバタ茶に言及するなど、それまで地域に脈々と受け継がれてきた歴史文化に光を当てる活動を行いました。これら御風の業績は現在の文化財の保存・活用にも深く関わっています。



図 20 街道と城館

4 あらゆる災害を乗り越えてきたまち

この地域の自然環境は多様であるがゆえに、時には災害をもたらし、人命財産へも影響を及ぼしますが、先人は、それを克服しながら、育まれてきた多様な風俗慣習や伝統を後世に伝え続けてきました。

災害を記録しているものには、慰霊碑などがありますが、地中に災害の痕跡が刻まれている場合も多く見受けられます。

例えば、焼山の活発な火山活動で埋没し、その後の河川浸食によって姿を現したトチの埋もれ木、土石流危険溪流指定地の谷間深くに埋没していた山岸^{やまきし}遺跡、洪水で埋没している六反田南遺跡・古川B遺跡、雪崩によって被災した白池集落跡^{しろいけ}などがあります。

大火に何度も見舞われた近世糸魚川町では、火災の焼土層と砂層の互層が確認され、火災から町を復興するために海岸の砂で整地をしていた様子が見えます。

また、文献資料では、天保の糸魚川町大火で、「御救い米」「御救い小屋」など現代の食糧支援や仮設住宅の原型が見られるほか、戸倉山大雪崩では、救助に当たる人足への炊出しなどの対応が見られるなど、人々が災害をどのように乗り越えてきたかの記録も残されています。



白池地蔵

文政7(1824)年に発生した戸倉山の雪崩で被害にあった白池住民9名の冥福を祈り湖畔に建立されていた地蔵



近世糸魚川町 土層断面